

本号の主な内容

【事務局より】

【2013年度調査の進捗状況のご報告】

【Dr.伊藤のすこやかコラム：お薬の広告】

【事務局より】

平素は「東京大学ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査」にご協力いただきありがとうございます。事務局の時田です。

2月の第2週と第3週の週末は記録的な大雪でした。大人にとっては大変な雪も、子どもたちにとってはたいへんな楽しみです。駐輪場の片隅の雪かき集められた雪の滑り台で遊んだり、かまくらの中ではしゃいだりしていました。雪かきによる腰痛はさておき、普段話す機会の少ない近所の人や子どもたちと会話できたことは、今回の降雪のプラスの面でした。

今回のメルマガの内容は、2013年度調査のご報告ならびに Dr.伊藤のすこやかコラム「水ぼうそうワクチンの定期接種化」です。リレーコラムはお休みをいただきました。

【2013年度調査の進捗状況のご報告】

この度の2013年度 東京大学ワーク・ライフ・バランスと健康に関する調査にご協力いただき誠にありがとうございました。

皆様からご回答いただきました貴重なデータの集計を引き続き行っています。集計後は、お父様、お母様、お子様別の個別の調査結果とお住まいの区全体の報告書を3月下旬頃にお送り致します。今しばらくお待ちくださるようお願い致します（住所変更がございましたら、お手数ですが事務局までご連絡いただけますと幸いです）。

この研究は（1）仕事と家庭との間のストレスだけでなく（2）仕事生活と家庭生活を両立していることの“効用”にも焦点をあてていること（3）WLBのあり方が自分だけでなく家族（配偶者や子ども）に及ぼす影響にも焦点を当てていること（4）これらの影響を5年間にわたって追跡していることにおいて世界でも類を見ないユニークな研究となっています。（本研究公式 Web サイトより抜粋）

本研究から得られる結果によって、わが国のWLB施策や少子化対策が大きく前進することが期待されています。今後、本調査のデータをもとに、共同研究者の小児科医、保健師・助産師と共に、順次、様々な報告が出される予定です。本メルマガでも皆様に役立つ情報を提供できればと思います。

【Dr. 伊藤のすこやかコラム：水ぼうそうワクチンの定期接種化】(伊藤 淳)

厚生労働省は今年の10月から水ぼうそうワクチンを定期接種にすると決定しました。概要は次の通りです。

- ・対象は1歳児と2歳児（生後12か月から36か月に至るまで）。
- ・合計2回で、3か月以上の間隔をおく。
- ・標準的には1歳を超えたら早めに1回、そこから半年～1年後に2回目を接種。

<経過措置～平成26年度（来年3月まで）～>

- ・生後36か月（3歳0か月）～60か月（5歳0か月）の子は1回接種

水ぼうそうに関しては、世間では次のように考えている方がいらっしゃいます。

「自然に感染したほうがいいんだよね」

これは誤解です。

水ぼうそうは健康なお子さんが感染しても、かゆいブツブツと発熱で終わることが大半で、死亡率は低いです。しかし生まれつき重い病気を持っている子や、体の弱い子が感染すると、致死率がグッと高くなります。

医学の進歩で、心臓の手術をした子や、肝臓や腎臓を家族から移植してもらった子、生まれた時の体重が1000gを下回るような未熟児の子が、元気に保育園や幼稚園に通っている時代になりました。その子たちにとっては、水ぼうそうに感染することは命にかかわる一大事です。

分かりやすいようにあえて極端な例を挙げて説明しますが、あなたの子が水ぼうそうに罹り、それを保育園でひろめて、同じクラスの子が死んでしまった、ということがあり得ます。

水ぼうそうワクチンを接種していても感染する可能性は20%程度あります。なので、痛い思いをしてワクチン接種したのにあなたのお子さんは感染するかもしれないし、体の弱い子だってワクチン接種していたのに感染して不幸な結果に至る可能性はあります。

ただし、ある集団の9割程度の子がワクチンを接種していると、そこでは感染が流行しない、という効果があります。もし、ある保育園で園児の9割がワクチン接種していれば、その保育園では水ぼうそうは流行らないということです。

水ぼうそうワクチンを接種する意義は、自分自身（子ども自身）が感染しないことではなく、集団の中で感染を広めないこと、にあるのです。そのような点で、水ぼうそうワクチンはもっと早くから定期接種化して一人でも多くの子が免疫をつけるべきものでありました。定期接種化を切望してきた小児科医の一人として感無量です。

お子さんがまだ水ぼうそうワクチンを接種していないようであれば、ぜひ接種していただきたいと思います。

伊藤淳(小児科医)

